

# Essay

Sapiarc.com

2010年8月24日(2010-08)

## アメリカの今昔

8月7日から14日までアメリカに出かけた。主な目的は、私の専門分野のひとつのラマン分光学に関する国際会議に出席することだった。その国際会議は40年以上前から隔年に開かれており、第22回の今回はボストンで開催された。

私が初めてアメリカの地を踏んだのは1965年8月26日である。成田空港が開港するより10年以上前のことで、小さかった羽田空港を夜になってから飛び立って、アンカレッジで給油して、サンフランシスコに着いたのは午後4時ごろだった。ジャンボ機はまだなかった。

サンフランシスコでは、ダウンタウンのほぼ真ん中に今でもあるシェラトン・パレスホテルに泊まった。翌朝、物珍しさから、ホテルの外で朝食を取ることにした。ホテルから出たとき、まず目に入ったのは、向かい側のビルの屋上に翻る星条旗であった。雲ひとつない青空を背景に、はためく Stars and Stripes。アメリカに来たのだと実感した。

その後、10日間ほどかけて、パロアルト、バークレー、シアトル、ミネアポリス、シカゴを回り、各地で大学などを訪問してから、デトロイトの近くでミシガン大学のあるアナーバー (Ann Arbor) に着いた。当時のデトロイト空港は小さなもので、飛行機からタラップで地面に降り、それからバグゲージ・クレイムまで歩いて行ったが、そ

の途中まで迎えの人が入って来ることができた。

アナーバーはデトロイトの西約60 kmのところにある小さな大学町だ。町は小さいが、大学は大規模で、学生数は当時でも3万人に近かった。まず住むところを決めなければならなかったが、私たちが着いたのが、新学期が始まった後だったので、大学のアパートなどに空きはなく、結局、町の西端に新しく建てられたアパート群のひとつに入った。リビングとダイニングルームを兼ねた広い部屋とベッドルームのあるもので、家内と私が2人で住むには十分なものだった。洗濯機は共用のものが地下室にあった。これは当時の私たちには珍しかった。

今回ボストンに行く前に、成田からデトロイトへ直行するデルタ航空機を利用して、アナーバーに行き、45年前に私を博士研究員として受け入れてくれた教授のサム・クリムさんと夫人のマリリンさんを訪問することにした。

デトロイト空港は45年前とは全く異なる巨大なものに変貌した。その大きさが成田空港や羽田空港と比べてどれぐらいなのかはわからないが、成田の第1と第2ターミナルの両方を合わせたものより大きいかもしれないと感じた。空港内に電車が走っており(成田の第2にも電車はあるが、空港ビル内ではない)、店舗や乗降客の数は成田以上であろう。航空機の発着回数もデト

ロイトの方が多いただろう。帰国の途中で、乗換えのために寄ったミネアポリス空港も巨大なものになっていて驚いた。デトロイトやミネアポリスなどアメリカ中西部の中核都市の空港がこのように大規模になったのは、この10年ぐらいのことではないかと思う。アメリカの底力のようなものを感じた。

入国管理カウンターで両手の指全部の指紋を取られた。その方法は、墨を付けるのではなく、特別の撮像装置のガラス台に左右の指先をのせる方法であった。9・11以後、指紋を取られるようになっていたが、この撮像装置には今回初めてお目にかかった。

ビザも変わった。出発前に、自分のパソコンからアメリカ大使館のシステムにアクセスして取得することになった。その結果はアメリカ全土の入国管理カウンターに伝えられているので、書面のビザはなくなった。パスポートを提示するだけで、入国審査官はその人間がビザを取得しているかどうかを瞬時に判定できる。全世界に張り巡らされた巨大なコンピューターネットワークがアメリカのセキュリティを守っているわけだ。

デトロイトからアナーバーに行くにはI-94 (IはInterstateの略) という幹線高速道路を使う。これを西向きに走り続けるとシカゴに達する。昔も今も、この道の両側の大部分は大きな樹木に覆われている。アメリカでは土地は広く、高速道路沿いにまで建物を建てることは必要がないのだろう。かつては交通量の多さからI-94の路面は痛んでいることがよく知られていたが、今回状況は遥かに良くなっていた。実際、あちこちで道路工事が行われており、そのための砂利でも積んできたのか、車輪が10個以上付いた巨大なトラックを何台も見かけた。昔からアメリカのトラックには巨大なものが多かった。あんなに巨大なトラックが走るの、路面が痛むのだと思うのだが。

ミシガン大学のメイン・キャンパスとその周囲の町の状況は、昔と余り変わっていない。大学の建物には新しいものもあるが、基本的には元からあるものを改修して、良い形にして使っているようだ。どの建物の状況も非常に良い。私の部屋があった物理学・天文学のビルなどは、外から見ると全く当時のままだ。このビルは50年ぐらい前に建てられたもので、私が居たころはまだ新しかった。

メイン・キャンパスには、大きな樹木が沢山ある。この状況も昔から変わっていない。多数のリスがいたものだが、その数は減ったように思えた。しかし、僅かな時間での観察に過ぎないから、本当に減ったのかどうかは定かでない。

クリムさんの自宅は、今年で建ててから50年になったのだが、私が45年前に見たときとほとんど変わっていないことに驚いた。しかし、庭の木々はずっと大きくなっていった。

クリムさんは今年84歳。10年ほど前からペースメーカーを付けているが元気で、現在も大学にオフィスを持っている。アメリカの大学では定年制がなくなったので、教授を続けるかどうかは本人の選択によるのだが、実際には外部から研究費を獲得できるかどうかで決まることが多い。クリムさんの場合は、4年ほど前から研究費は切れているのだが、大学がオフィスをもつことを認めているので、今でもほとんど毎日大学に出ているそうだ。彼の場合は、特殊な例かもしれない。

夫人のマリリンさんは、数年前に両足の膝やヒップの骨をチタンの代替物と交換した。その手術はうまく行って、今ではほとんど元どおりの生活ができていそう。昔から料理が得意で、今回も手料理の夕食をご馳走になった。デザートはチョコレートケーキも彼女が作ったものだった。何事にもはっきりした意見を持っており、積極的に行動する性格は今でも全く変わっていない。アメリカ人女性のひとつの典型であ

ろう。クリム夫妻の末長い健康を願って、クリム家を辞去した。

クリム家からメイン・キャンパスの近くのホテルに戻る途中に、大学のもうひとつのキャンパスを見に行った。ノース・キャンパスと呼ばれているこのキャンパスは、45年前にもあったのだが、当時は広い土地にまばらに建物があつた。その後、工学関係の教育研究施設が全部こちらに移ったため、今では多数の建物が建っている。これは大きな変化だ。そこから更にメイン・キャンパスに近いところに、大学附属病院の立派な病棟がぎっしりと並んでいる。ここには昔も病院があつたが、これほど建てこんではいなかった。ミシガン州政府は、納税者の健康を守るために、州立大学であるミシガン大学の附属病院を充実させることに力を入れているのだろう。日本の消費税に似た売上税 (sales tax) は州税で、州によって課税方式が違うはずだ。

私たちが住んでいたアパートがどうなっているか見に行つた。ところが、残念なことに、なくなっていた。ここだったと場所の特定はできるのだが、別の建物が建つていた。20年ほど前にも、一度見に来たことがあり、そのときには元と変わらない形であつたので、それ以後の余り最近ではない時期に変化が起きたようだ。これが、今回私がアナーバーで経験した一番大きな変化だった。

翌日の午後、ボストンに行くため、デトロイト空港に戻つた。ここで、搭乗券を発券機で出すのに多少手間取つた。最近日本でも似たような発券機はあるが、デルタ航空の方式は異なつていた。こういうときには、同行者が居るのは有り難いことだ。その発券機には日本語の説明もあつたのだが、それだけでなく、デトロイト空港ではあちこちの案内掲示に日本語も出ていた。中国語や韓国語は出ていなかったような気がする。こういう点は、昔と今では大違いだ。

ボストンに行くのは23年ぶりになる。私のはじめてボストンに行つたのは1966年の

8月末で、1週間滞在した。(その後、ミラーノ工科大学で博士研究員を勤めるため、ボストン空港からアリタリア機で初めて大西洋を渡つた。) 実を言うと、そのとき以来、私はボストンには良い印象を持っていなかった。その理由は、アナーバーのような良い環境の小都市で生活した後では、ボストンという古い都市は汚く見えたことだつたと思う。その後もボストンには3回行つたが、私のボストンに対する印象は変わらなかつた。

しかし、ボストンに対する私の印象は、今回大きく変わった。今回、私はこの町がとくに汚いという感じを持たなかつた。あるいは、ボストン自身も都市再開発などで昔と比べてきれいになったのかもしれない。国際会議はボストンの中心部にあるパーク・プラーザ・ホテルで行われた。格式のある伝統的なホテルだ。会議ではいろいろなことがあり、大勢の人にも会つた。ボストン・レッドソックスの本拠地 Fenway Park Stadium にも入つた。会議のあと、ハーヴァード大学とMITをかけ足で見つて回つた。日本人に人気のある有名なレストラン Union Oyster House にも行つた。

今回の小旅行で、アメリカという国がどんどん変わつていく面と昔ながらの面を併せ持っていることを再確認した。また、この国の活力は衰えていないことを確信した。いろいろ困難な問題を抱えながらも、アメリカは世界をリードする存在であり続けるだろう。(おわり)